The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	中国人大学生が苦手・得意とするコミュニケーション場面に関する研究
Author(s)	後藤, 学; 大坊, 郁夫
Citation	対人社会心理学研究. 2008, 8, p. 43-50
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/9526
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

対人社会心理学研究, 8, 2008

中国人大学生が苦手・得意とするコミュニケーション場面に関する研究

後藤　学(大阪大学大学院人間科学研究科)[1)]
大坊郁夫(大阪大学大学院人間科学研究科)

本研究では、中国人大学生 420 名を対象に自由記述を中心とする質問紙調査を実施し、苦手・得意なコミュニケーション場面と、その場面と回答者の非言語的表出性の関連性について検討した。回答は中国語でなされたが、それを日本語に翻訳し、テキスト・マイニングツールを用いて整理した。その後、性別と ACT 得点との関連を対応分析、クラスター分析により検討した。中国人大学生の苦手とするコミュニケーション場面として、初対面の人との会話、知り合いと偶々会って話題がない、気を遣う相手や年長者と何を話せばいいか分からない、が挙げられた。後藤・大坊(2003)で得られた日本人大学生の結果と比較すると、中国人大学生は友達との関わりについての言及が多いこと、日本人であればその場限りとみなしてしまうような相手との関係でも深く交流をはかろうとすることが苦手場面と関連しやすいことが示唆された。

キーワード: 中国人大学生、対人場面、苦手意識、社会的スキル、非言語的表出性

問題と目的

中国の若者の対人関係に対する懸念

現在、中国は 12 億人ともそれ以上ともいわれる人口を抱え、右肩上がりの経済成長を続けている。間近に北京オリンピックや上海万博を控え、アジアのみならず世界で最も注目を浴びている国といっても過言ではない。この急激な成長は中国の若者が支えているわけだが、その成長の裏で中国でも若者の対人関係に対して心配の声が上がってきているという。

その原因の一つとしてたびたび指摘されているのが、1970 年代からはじまった「ひとりっ子」政策である。それまでの中国では、人口に対して資源が不足し、人口に見合った社会基盤の整備が立ち遅れたため、深刻な経済的困難を経験していた。そのため、人口の増加を抑え、人口の質を高めるという基本政策のもと、1980 年代からは違反者に対して厳しい制裁が加えられるようになり、結果的に高い人口抑制効果を挙げた。

ただその一方で、長年にわたるひとりっ子政策推進の結果、中国では「小皇帝」、「小太陽」などと呼ばれる、ひとりっ子の家庭が急増した。ひとりっ子の家庭環境では、子どもに対する教育への投資が高まり、大学への進学率などの教育水準が飛躍的に高まった。また、子どもは、周りの大人たちから学力向上のみに専念できるような環境を整えてもらい、本来子ども自身がすべきことについても周りの大人たちから何でも援助してもらえるようになっていった。そのようなことが、子どもの人格成長を歪め、わがままで、我慢ができず、対人関係を苦手とするような子どもが多くなったという指摘(李, 2004)につながっているのである。

さらに、中国でも IT 産業の急成長により、とりわけ若者の間で携帯電話やパソコンの使用が急速に拡大した。このような電子機器の使用の広がりは、コミュニケーション効率が高く、より手軽な間接的コミュニケーションの機会を増やしていった。加えて、中国の「改革開放政策」による経済改革は、経済の高度成長をもたらした。それに伴って中国社会に急激な変化が発生し、伝統的な価値観の変革が起きはじめた。伝統的な人間関係のあり方と新しい社会情勢によって生まれた人間関係の新スタイルが混在し、若者の対人関係での適応をより難しいものにしている。

背景こそ異なるものの、若者の対人関係に対する心配は、日本でもここ 10 数年ほどの間指摘され続けてきた。核家族化、少子化の影響による対人関係の未熟さ、IT技術との関わりの中で仮想現実(バーチャルリアリティ)と現実の境を見失ってしまうといった指摘、間接的なメディア世界に閉じこもりがちになり、現実の人間関係が希薄になるといった懸念は、枚挙に暇がない(例えば、中村, 2000; 大坊, 2003)。日本と中国は社会的な背景こそ異なるものの、若者の対人関係が危ぶまれているという点では共通している。

苦手意識に関する研究

ところで、若者の対人関係に関する研究は、既に発達心理学、社会心理学、パーソナリティ心理学などの多様な領域で研究蓄積がある。特にきょうだい構成やパーソナリティ、社会的スキルといった個人要因が対人関係に関わる不適応傾向(例えば、孤独感や対人不安、抑うつ)の原因となることを示した実証的研究は数多い。しかしながら、この個人要因ももとをただせば、これまでの社会的経験の蓄積であり、学習の結果形成されたものである。過去のポジティブ(ネガティブ)な対人経験が次の対人行動を促進(抑制)させ、そのような経験の蓄積が影響して個々人のパーソナリティが形成されると

すれば、日常生活の中で次から次に直面する一つひとつの対人経験を円滑に進めることが何よりもまず重要である。このようによりミクロな視点で若者の対人関係をとらえると、対人関係とはその人の他者とのかかわりの集積からなるものであり、個々人が日常生活の中でどのような対人関係に煩わしさや難しさを感じ、それにどう対処しているか、またその背景にどのような関係や状況が存在するのかを把握することが必要不可欠となる。そして、対人関係の煩わしさや難しさの背景にある関係や場面の共通項を拾い出すことで、今後の中国での社会的スキルの訓練・教育や不適応傾向への対処のヒントとなることが期待される。従来、このような視点からの研究はあまりなされてこなかったが、本研究では円滑なコミュニケーションを阻害する「場面(相手や状況)」という視点に注目したい。

これまでの心理学的研究成果から、コミュニケーションの状況要因と関連する知見を挙げるとすると、第一に従来のパーソナリティ研究や社会的スキル研究を通じて得られている不適応傾向が生起しやすい状況を把握しようとした研究が挙げられる。第二としてネガティブな対人経験との関連性から、対人・対面苦手意識に関する研究がある。

不適応傾向に関わる対人場面　対人的不適応傾向と社会的スキルの関連性を扱った研究の中には、不適応傾向がどのような状況で表面化しやすいかを明らかにした研究がある。例えば、佐藤・佐藤・相川・高山(1990)は、クラスメートからの評定によって引っ込み思案傾向が強いと同定された子どもたちに児童用の社会的スキル尺度を実施し、どのような尺度項目で非引っ込み思案の子どもとのズレが顕著に認められるかを検討している。引っ込み思案傾向の強い子どもは、1)「相手の気持ちを考えて話す」、「みんなのためになることを考える」などの協調性や役割取得に関わるスキル、2)「自分のして欲しいことを上手にお願いする」、「友達の意見に反対するときには、自分の意見を言う」などの自分の意見や権利を適切に主張するスキル、3)「友達の喧嘩をうまくやめさせる」などの対人的葛藤場面をうまく解決・処理するためのスキル、4)「遊んでいる友達のなかに入る」などのグループの仲間入りに必要なスキルなどが不足していることを明らかにしている。ここで尺度項目に具体的に含まれている対人場面は、不適応傾向があるかないか、もしくは社会的スキルが不足しているかいないかを同定するために役立っている。

また岸本(1994)は、対人場面で感じる気恥ずかしさ(状況シャイネス)が多くの人々の間でほぼ共通した経験であることを報告している。特に状況シャイネスを経験しやすい状況としては、「集団のなかで」、「異性との1対1で」、「他人・未知の人との1対1で」が挙げられている。この知見は、相手の人間が大勢であったり、異性であったり、未知の人であるなど、状況として大勢の中で自分ひとりか、相手と1対1であるというときに、人が不快感を生起しやすいことを指している。岸本(1994)によれば、これらの対人場面は、第一に知識や過去の経験を役立てることが困難な不慣れな状況であること、第二に相手からの注目や評価を懸念しやすい状況であることから、不安感や恐怖感が生起されやすいという。このように円滑な対人関係を妨げる要因は、具体的な対人場面に特有な相手や状況などと関連していることがわかる。

対人苦手意識・対面苦手意識　前述したように、不適応的なパーソナリティ(対人不安やシャイネス、孤独感、抑うつなど)の人が、どのような場面で円滑に振る舞うことが難しいかはかなり明らかになっている。しかしながら、不適応傾向などのパーソナリティ要因を排除して、人が一般的にどのような場面で円滑に振舞うことが難しいか、もしくは難しいと感じているかを検討した研究は数少ない。日向野・堀毛・小口(1998)、日向野・小口(2002)は、特定の人物を苦手だと思うという多くの人が日常的に経験している感覚を対人苦手意識(特定の他者に対する否定的な感情と消極的な態度の総称と定義)と呼び、測定尺度を開発、対人苦手意識の実態と生起過程について検討している。日向野・堀毛・小口(1998)は大学生を対象にした対人苦手意識を、日向野・小口(2002)は学生に加えて社会人の部下に対する対人苦手意識を測定した。対人苦手意識は多くの人が共通して抱くものであり、その意識構造は特定の苦手な人物に対する「わずらわしさ」と、その人物との「関係に対する懸念」の 2 因子から構成されている(日向野・小口, 2002)ことを明らかにしている。そして、わずらわしさは特定の他者に対する対人苦手意識と、関係に対する懸念は特定の場面で覚える対人苦手意識とそれぞれが別個に結びついている可能性を指摘している。さらに、日向野・小口(2007)は児童が学級集団の中で友達の行いを注意しなければならない場面で覚えるような苦手意識を対面苦手意識と呼び、特定の他者との対人関係という視点だけでなく、特定の場面での対人関係という視点についても導入する必要性を指摘している。以上のことから、対人場面における苦手意識を考える場合、相手と状況の両者を考慮する必要があると考えられる。

また、後藤・大坊(2003)は、日本人大学生の苦手・得意なコミュニケーション場面を自由記述調査により把握することを試み、抽出される一般的な場面(コミュニケーションの相手や状況)特徴に共通性があること、比較的

特異な場面については、その人の社会的スキルの程度との関連性が示唆されることを明らかにしている。そこで、本研究では後藤・大坊(2003)とほぼ同様の調査方法によって、中国人大学生の苦手とするコミュニケーション場面を抽出し、日本人大学生との比較を行うことを目的とした。

方法

回答者

2005年3月に中国の大連市にある3つの大学の学生(理系学生を含む)を対象とする講義の一部にて実施した。大学生591名(男性300名、女性291)から回答が得られ、回答者の平均年齢は 20.93 歳(標準偏差1.37)であった。回答の欠損や自由記述箇所への未回答が見られたため、それを除外し、苦手なコミュニケーション場面で420名(男性196名、女性224名)、得意なコミュニケーション場面で413名(男性185名、女性228名)のデータを分析対象とした。

調査票

「対人関係・コミュニケーションに関する意識調査」と題した調査票で、フェイスシートと自由記述項目、社会的スキル測定尺度から構成された。本調査にあたり、日本語で作成されたものを全て中国語に翻訳して用いた。

フェイスシートならびに自由記述項目は、後藤・大坊(2003)に一部手直ししたものをベースにした。まず回答者の年齢や性別、出身地を尋ねた。次に自由記述項目では、質問 1「あなたが普段、コミュニケーションに戸惑ったり、苦手と感じたりするのはどんなときですか」、質問 2「逆に、あなたはどんなコミュニケーション場面を得意にしていますか」への回答を求めた。本研究では、後藤・大坊(2003)での問題点を考慮し、自由記述項目の回答形式を若干変更した。後藤・大坊(2003)では「相手との関係、おかれている状況などをできるだけ詳しく具体的に回答」するよう求めたが、実際の回答を読んでみると相手や状況が明確でない記述が少なくなかった。そこで、今回は苦手・得意なコミュニケーション場面を記述させるにあたり、あらかじめ、場面を「相手」と「状況」の欄に分けて別々に記述させるようにした。

また社会的スキル尺度としてACT中国語版(毛・大坊, 2007)を用いた。ACT(Affective Communication Test)は、Friedman, Prince, Riggio, & DiMatteo(1980)が対人場面における非言語的表出性を測定する目的で作成した。その後、大坊(1991)がこの尺度を日本語版にして使用し、この尺度が対人関係における単なる表現力にとどまらず、顕示性や社会的外向性といった社会的な積極性や、情動の送信能力とも関連を持ち、分布の偏りや尺度得点の性差もほとんど認められないことを報告している。加えて、中村・益谷(1991)はACTがSSI(Social Skill Inventory)の下位尺度である非言語的感受性とも相関関係があり、感情の送信だけでなく、解読能力にも正の相関関係があることを指摘している。以上のことからACTは非常に汎用性の高い社会的スキル測定尺度であるといえる。なお、調査票の中国語訳の検討は、日本の大学院に在籍し、在日歴5年以上の3人の中国人留学生によって行われた[2)]。

結果

データの事前処理

自由記述データの処理 自由記述データについては、テキスト型データ解析ソフト「WordMiner(R) Version1.130」(日本電子計算(株))を用いて、分かち書き・キーワード抽出処理を行い、その処理結果についてコミュニケーション相手と状況説明に関する用語をもれなく網羅するよう以下のような修正を加えた[3)]。

コミュニケーション場面の「相手」に関する記述は、相手が誰か(例:「親戚」、「外国人」)、どのような特徴を持つ人か(例:「嫌いな人」、「内向的な人」)がわかるように適宜修正を加えた。したがって、複数の単語からなる言葉も一つのキーワードとして抽出している。また「友達の友達」や「親の友達」のように誰かを介した関係を表現した記述では、この記述を「友達」、「友達」、「親」、「友達」と分けてキーワード抽出してしまうとオリジナルの記述の意味を失うので、その種の記述には特に配慮した。

コミュニケーション場面の「状況」に関する記述では、「しゃべる」、「話す」、「会話する」のようにほぼ同じような行為が違った表現で記述されることが多い。これについては、できる限り同一の行為を一つのキーワードにまとめると共に、微妙なニュアンスの違いが感じられるものについては、そのまま別のキーワードとして残した。これらの判断は翻訳に関わった関係者と検討の上、決定した。

ACT 尺度得点による群分け 有効データ(ここでは苦手なコミュニケーション場面の有効データで代表させた)について ACT 尺度の合計得点を算出したところ、回答者の性別による差が有意であった($t(418) = 2.61$, $p < .01$)。平均値(標準偏差)は全体で 67.07(12.04)、男女別では男性65.44(12.04)、女性68.49(11.88)であった。以後の分析では、ACT 尺度得点の高さと苦手・得意とするコミュニケーション場面の関連を検討するため、回答者をACT高群、中群、低群の3群に分けた。ACT 得点に性差が認められたことから、3 群への分割

は男女別に行い、3 群がほぼ均等な人数となるように配慮した。

苦手なコミュニケーション場面(n = 420)では、男性(n = 196)の ACT 低群 67 名(得点範囲 39-60 点)、中群 65 名(61-69 点)、高群 64 名(70-109 点)で、女性(n = 224)の ACT 低群 76 名(得点範囲 38-63 点)、中群 72 名(64-73 点)、高群 76 名(74-112 点)であった。得意なコミュニケーション場面(n = 413)では、男性(n = 185)の ACT 低群 66 名(得点範囲 39-60 点)、中群 57 名(61-69 点)、高群 62 名(70-92 点)で、女性(n = 228)の ACT 低群 73 名(得点範囲 34-63 点)、中群 78 名(64-73 点)、高群 77 名(74-112 点)であった。

苦手なコミュニケーション場面に関する検討

質問 1 の回答から得られたキーワードを整理し(構成要素変数: 48 個)、構成要素変数(キーワード)×質的変数(性別(男、女)とACT群(高、中、低)の合成変数)のクロス表を基にしたコレスポンデンス分析を実施した。多次元データ解析にもWordMiner(R) Version1.130 を用いた。説明率の高い順に 2 次元を採用し、第 1 次元を横軸、第 2 次元を縦軸としてカテゴリースコアをプロットした(Figure 1)。さらに、構成要素変数のクラスター化を試み、そこで抽出された構成要素変数のクラスターと質的変数との関連性をプロット図上で検討した。WordMinerによるクラスター分析では、階層的分類法と非階層的分類法を併用する方式であるバイブリッド法が用いられている(大隅, 2000)。この方法は、大量データの分類操作において、明示的なクラスターの存在があまり期待できず、しかも、はずれ値が頻出するといったスコア分布のクセを考慮した分類法である。なお、ここでは 5 度以上の出現頻度を示すキーワードのみを使用した。その結果、以下で示す 4 クラスターが抽出され、次のような特徴とACT群との関連性が認められた(Table 1)。

キーワードの頻度に注目すると、中国人大学生は全般的に初対面の人、同級生や友達、先生や親世代、よく知らない人などを「相手」とした場合に苦手意識を感じており、何を話せばいいかわからない、話題がない、偶然会う、会話する、初めて話す、会う、二人きり、挨拶するなどの「状況」で苦手意識を感じていたことが分かる。

中国人大学生の苦手なコミュニケーション場面として 4 つのクラスターを抽出した。第 1 クラスターは同級生や友達などと偶然出会ってしまって話題がないという状況であった。具体的な記述を見ると、偶然に出会った同級生や友達がさほど親しくない相手だから苦手と感じるわけではなく、相手と状況のミスマッチによる戸惑いと捉えることができる。大学の同級生や友達とキャンパス内で会うのであれば、大学生活に関わる話題の中でコミュニケーションが簡単に成立するが、その同級生や友達と思ってもみないところで出会うと、何を話したらいいかわからず口ごもってしまう。また、少数の意見だが上司や好意を抱いている相手と食事をしたり、話したりする場面についてのキーワードも同じクラスターに抽出された。この場面は相手から好かれたい、よく評価されたいといった評価懸念に関わる状況といえる。第 2 クラスターは先生や嫌いな相手、ルームメートと二人きりで、無駄話をするという場面が抽出された。このクラスターは「状況」よりもその「相手」に特徴があると考えられ、既に相手のことをある程度知っていて、これからも関係が続くことが予想されるような相手であるといえ、普段以上に気を遣わなければならない相手なのかもしれない。第 3 クラスターは、親の世代にあたる人間や年長者(例えば、親戚、友達の親、親の友達)など、あまり馴染みのない相手とコミュニケーションをとる際に、何を話せばいいかわからない状況での苦手意識が共通して訴えられていた。具体的な記述を見ると、「何を話せばいいかわからない」状況というのは、前述の「話題がない」状況とはまた状況が違い、話しかけるとしてもどう切り出そうかとか、挨拶を終えたら立ち去ってしまってもいいだろうか、といった振る舞い方がわからないことによる居心地の悪さのようなものを指していると考えられる。第 4 クラスターは初対面の相手や異性と会話をする、一緒にいるという状況が挙げられた。未知な人物全般に対する苦手意識と考えられ、日本人大学生(後藤・大坊, 2003)でも最も顕著に認められた苦手場面であるが、中国人大学生では「異性」の相手に対する苦手意識も高い頻度で挙げられている点が特徴的である。

次に、抽出された苦手場面と社会的スキル(非言語的表出性)との関連を検討した。社会的スキルの低い者は第 3 クラスター(年長者との会話)を、社会的スキルの高い者は第 1 クラスター(誰かとバッタリ会ったとき)を苦手場面として報告する傾向が強かった。第 3 クラスターのような特定の「相手」に対する苦手意識と比較して、第 1 クラスターのように相手と状況がミスマッチになっている場面への対応は、たとえ社会的スキルがある程度身についている人物にとっても困難なことなのであろう。

また、社会的スキル中程度の回答者で見られるように、男女によって特徴的なコミュニケーション場面が異なっていることも示唆された。男性の場合、初対面の人とのコミュニケーションに加え、異性とのコミュニケーションに対する戸惑いが多く挙げられた。ここで抽出された異性との関係も、初対面の人と同様、概して浅いもので自然な流れの中でその相手としばらく一緒にいる必要がある場合にその対処に困るという場面であった。一

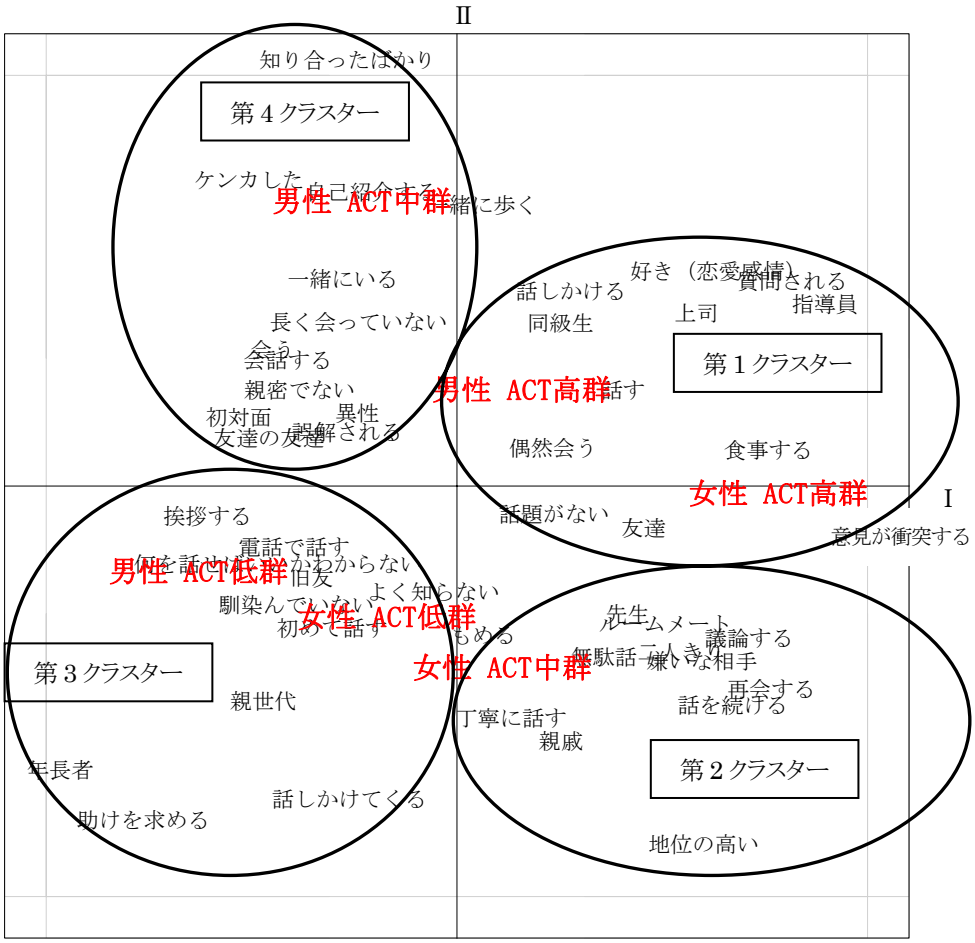

Figure 1　中国人大学生の苦手場面における布置

Table 1　中国人大学生の苦手場面に関する４つのクラスター

クラスター	相手	度数	状況	度数
第1クラスター 誰かとバッタリ会ったとき ACT高群	同級生	58	話題がない	43
	友達	46	偶然会う	32
	上司	12	食事する	9
	好き(恋愛感情)な人	11	話す	8
第2クラスター 気を遣う相手と二人きり ACT中群女性	先生	28	二人きり	19
	嫌いな相手	17	無駄話	10
	ルームメート	11	話を続ける	7
第3クラスター 年長者との会話 ACT低群	親世代	17	何を話せばいいかわからない	61
	よく知らない人	14	初めて話す	21
	馴染んでいない人	13	挨拶する	18
	年長者	7	電話で話す	10
第4クラスター 初対面の人との会話 ACT中群男性	初対面の人	59	会話する	27
	異性	32	会う	20
	長く会っていない	9	一緒にいる	13

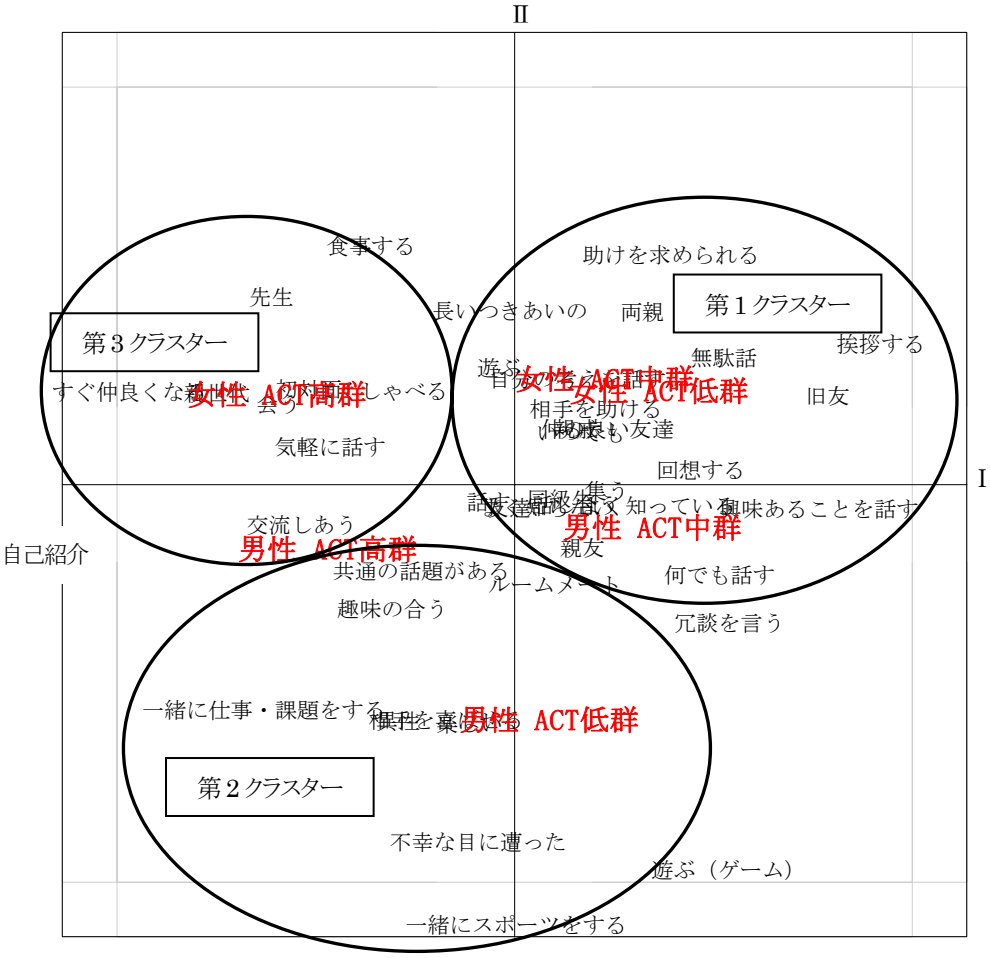

Figure 2　中国人大学生の得意場面における布置

Table 2　中国人大学生の得意場面に関する３つのクラスター

クラスター	相手	度数	状況	度数
第1クラスター 仲間とならいつでも	友達	82	話す	32
	同級生	67	いつでも	31
ACT低群女性、ACT中群	仲の良い友達	47	無駄話	28
	よく知っている人	21	遊ぶ／話し合う	17
第2クラスター 特定の人と特定の話題で	趣味の合う人	16	共通の話題がある	30
	異性	7	一緒にスポーツをする	11
ACT低群男性	不幸な目に遭った人	5	相手を喜ばせる／遊ぶ(ゲーム)	6
第3クラスター 初対面の人と親しくなる	初対面の人	44	交流しあう	15
	親世代	7	気軽に話す	12
ACT高群	先生	7	すぐ仲良くなる	11

方、女性の場合には、普段以上に気を遣う相手との関係が多く報告される傾向にあった。関係が続くことは間違いないが、必ずしも親密になることを欲していなかったり、どこまで親しくつきあっていいものかはかりかねていることが苦手意識と結びついているのかもしれない。

得意なコミュニケーション場面に関する検討

質問 2 も同様に回答を整理し(構成要素変数: 44 個)、構成要素変数(キーワード)×質的変数(性別(男、女)とACT群(高、中、低)の合成変数)のクロス表を基にしたコレスポンデンス分析を実施した。説明率の高い第 1 次元(横軸)、第 2 次元(縦軸)のカテゴリースコアを(Figure 2)にプロットした。また、引き続きクラスター分析を行い、以下の 3 クラスターを抽出した(Table 2)。キーワードの頻度に注目すると、中国人大学生は友達や同級生との全般的な関係、初対面の人とでもすぐに親しくなれるという人づきあいの良さを頻繁に報告していた。

社会的スキル(非言語的表出性)との関連を加えて検討すると、初対面の人とでも気軽に話せ、交流しあい、すぐに仲良くなるという場面は、社会的スキルの高い者からより多く報告される傾向にあった。ここでの初対面の人とは、汽車の中や公共施設などでたまたま場を同じくした相手などが頻繁に挙げられていた。

また社会的スキルの低い男性では、趣味の合う相手と共通の話題で話せる状況や、不幸な目に遭った相手を元気づける状況といった非常に限定的な場面が抽出された。さらに男性全体を通じて、一緒にゲームやスポーツをしているときのコミュニケーションが得意だという報告も多かった。ただし、これらはいずれも他の場面と比べると度数そのものが少ないことは考慮せねばならない。

考察

本研究では、中国人大学生の苦手・得意とする対人場面を明らかにし、そこで抽出されたコミュニケーション場面を日中で比較することで、各国の文化の中で必要とされる社会的スキルの特徴をより明確に把握することを目的とした。日本人大学生と中国人大学生では、苦手・得意と報告した対人場面に共通点と相違点が存在した。

中国人大学生の苦手・得意な対人場面

中国人大学生は、初対面の人との会話や、同級生や友達などと予期せぬ状況で会ったときに、戸惑いや苦手意識を共通して経験していた。また、先生や嫌いな相手、親世代の人などの年長者との会話にも苦手意識を抱いていることが分かった。

また、中国の大学生から抽出された苦手場面の大きな特徴として「話題がない」、「何を話せばいいかわからない」、「話を続ける」といったキーワードが頻繁に用いられていた。初対面の相手とコミュニケーションをとるのであれば、その人と共通の話題を見つけていかに楽しく時間を過ごすか、また知り合いと予期せぬ状況で出会ったならば、どう相手に配慮しつつ場をもたせるか、はたまたより気遣いの必要な相手や年長者とのコミュニケーションであれば相手の気分を害することなくいかに場をもたせるか、といったことへの配慮が常に意識されている。中国人に関する文化論や様々な先行研究(毛・大坊, 2006; 末田, 1995)でも指摘されているように、相手を立て、相手の面子に配慮する中国人全般の特徴がコミュニケーションの各場面にもあらわれているといえる。

日本人大学生と中国人大学生の比較

初対面の相手とのコミュニケーション場面は、相手のことが分からないと先の予測が難しいためか、対人関係に関わる悩みとして日中で共通して抽出された。しかしながら、初対面の相手とどのように関わろうとするのかという点では、日本人大学生と中国人大学生の間に意識の差があるように思われる。日本の大学生は初対面の人と会話をせねばならないときに、相手との関係はおそらくはその場限りのものなので、とりあえず天気のことや最近話題になっていることについて話して、無難にそれを乗り切ろうとすることが念頭にあるのかもしれない。これに対して中国の大学生は初対面の人とすぐに親しくなり、交流しあえることを目指している。そして、そういうことが既に得意であると回答した回答者も多くいた。日本人は初対面の人とのコミュニケーションを通して、必ずしもその場を楽しくしようとか、お互いの対人関係を広げようといった目標のもとで振る舞ってはいないのに対して、中国人は初対面の人とのコミュニケーションの中でも関わりを深めていくことを目標にしている。そのため、日本人が初対面の相手との関係を表層的な取り繕うだけのコミュニケーションに終始させてしまうのに対して(後藤・大坊, 2003)、中国人はその機会を活かして相手との交流を深めようとしていく。そのような対人的積極性、社交性、コミュニケーションの目標といったものの違いが抽出された各場面で見てとれた。

そもそも、日本人大学生では苦手な場面でも得意な場面でも、「友達や同級生」についての言及が少なく(後藤・大坊, 2003)、中国人大学生では「友達や同級生」についての言及が多いこと自体興味深い。逆に日本人大学生では、苦手な場面でも得意な場面でも、初対面の人とアルバイトで関わる相手との関係が挙がってきた。このような違いは、コミュニケーション・スタイルの違い(末田, 1995)であることはもちろん、日本と中国の大学生の生活スタイルの違いが影響したものであるかもしれない。中国の大学生はルームメートなどとの関係を含め、日本の大学生よりも学生同士の交流がより深いことは容易に想像できる。今後は日中の大学生の生活スタイルなどもふまえた分析ならびに考察が必要であろう。

最後に、日本の大学生と中国の大学生で共通していた点を挙げておきたい。それは、社会的スキルの低い男子学生がごく限定的な関係を得意なコミュニケーション場面として挙げていた点である。日本でも中国でも共通して、趣味の合う相手に関するキーワードが抽出されてお

り、日本では子ども、中国では不幸な目に遭った(例: 失恋した、試験に失敗した)人への対応が特有のキーワードとして挙がった。少なくとも社会的スキルの低い大学生は、相手に合わせた話題の提供、会話の維持といったことが苦手で、そのようなことは特定の相手でしか上手にできないことを示唆しているものと思われる。中国では、日本以上にいかなるコミュニケーション場面でも相手との深い交流が求められるのだとすれば、それができないことは適応的な面で大きな問題となる可能性がある。

引用文献

大坊郁夫 (1991). 非言語的表出性の測定 ―ACT 尺度の構成― 北星学園大学文学部北星論集, 28, 1-12.

大坊郁夫 (2003). 社会的スキル・トレーニングの方法序説 ―適応的な対人関係の構築― 対人社会心理学研究, 3, 1-8.

Friedman, H. S., Prince, L. M., Riggio, R. E., & DiMatteo, M. R. (1980). Understanding and assessing nonverbal expressiveness: The affective communication test. *Journal of Personality and Social Psychology*, 39, 333-351.

後藤 学・大坊郁夫 (2003). 大学生はどんな対人場面を苦手とし、得意とするのか？―コミュニケーション場面に関する自由記述と社会的スキルとの関連― 対人社会心理学研究, 3, 57-63.

日向野智子・堀毛一也・小口孝司 (1998). 青年期の対人関係における苦手意識 昭和女子大学生活心理研究所紀要, 1, 43-62.

日向野智子・小口孝司 (2002). 対人苦手意識の実態と生起過程 心理学研究, 73, 157-165.

日向野智子・小口孝司 (2007). 学級集団内地位とパーソナリティ特性からみた対面苦手意識 実験社会心理学研究, 46, 133-142.

岸本陽一 (1994). シャイネスの経験 ―生理・認知・行動的側面― 磯 博行・杉岡幸三(編) 情動・学習・脳 二瓶社 pp.151-164.

毛 新華・大坊郁夫 (2006). 中国の若者の人づきあいスタイルについての研究 ―自由記述によるカテゴリカルな検討― 対人社会心理学研究, 6, 81-88.

毛 新華・大坊郁夫 (2007). KiSS-18 の中国人大学生への適用 対人社会心理学研究, 7, 55-59.

中村 功 (2000). 携帯メールの人間関係 東京大学社会情報研究所(編) 日本人の情報行動 東京大学出版会 pp.285-303.

中村 真・益谷 真 (1991). 感情的コミュニケーション能力と社会的スキル 日本社会心理学会第 32 回大会発表論文集, 318-321.

大隅 昇 (2000). 調査における自由回答データの解析 ―InfoMiner による探索的テキスト型データ解析― 統計数理, 48, 339-376.

李 景芳 (2004). 中国人を理解する 30 の「ツボ」 講談社

佐藤正二・佐藤容子・相川 充・高山 巌 (1990). 極端な引っ込み思案児の社会的適応と社会的スキル 宮崎大学教育学部紀要(教育科学), 68, 1-18.

末田清子 (1995). 「面子」の概念の違いとそれによるコミュニケーション・スタイルの違い ―中国人と日本人― ヒューマン・コミュニケーション研究, 23, 1-14.

註

1) 第一著者の現所属: (株)原子力安全システム研究所

2) 本研究の実施ならびに質問紙や回答の翻訳にあたり、毛新華さん(本学大学院博士後期課程)に多大な協力をいただいた。記して感謝する。

3) WordMiner(R)は、日本電子計算株式会社によって制作・開発されたソフトウェアで、膨大な質的データの解析が可能である。本ソフトウェアでのテキスト型データの分かち書き・キーワード抽出機能は、株式会社平和情報センターの Happiness(R)/AiBASE により提供されている。

Open-ended questions about the communication situation and social skills in Chinese university students

Manabu GOTO (*Graduate School of Human Sciences, Osaka University*)
Ikuo DAIBO (*Graduate School of Human Sciences, Osaka University*)

This present study was designed to examine the relationship between the dislikable/likable communication situation and the degree of social skills in Chinese university students. The contents of the interpersonal situation were summarized by the text mining software. Correspondence analysis and cluster analysis of data from 420 undergraduate students showed the following 3 findings. (1) Chinese university students were not generally good at communicating with the strangers, the person who takes care with, the old. (2) The nonverbal expressive students puzzled when they meet the person in the place in which it doesn't imagine it. (3) The low nonverbal expressive males ware good at behaving in the limited relations. These consequences were discussed from viewpoint of the culture theory and of the application to the social skills training.

Keywords: Chinese university students, interpersonal situation, dislikable communication situation, social skills, nonverbal expressiveness.